

友田昌宏編著

『東北の近代と自由民権——「白河以北」を越えて』

鈴木 啓孝

1

本書は、編者の友田昌宏氏が所属する東北大学東北アジア研究センター上歴史資料学研究部門が主催する共同研究「東北の自由民権運動」の成果である。二〇一四年四月から二〇一五年一二月まで約二年間にわたって複数回開催された研究会での報告を基に一冊の書がまとめられた。同研究会に参加した八名の研究者が各々一つの論考を提出し、それが本書の各章となっている。

その構成は以下の通り。

序 章 「白河以北」から自由民権運動研究に新たな息吹を！（友田昌宏）

I 過去の研究が問いかけるもの

第一章 東北自由民権運動研究史の再検討——精神史の提唱をめぐる

（河西英通）

第二章 宮城県における自由民権運動の展開とその研究（千葉昌弘）

II 各地における運動の展開

第三章 社会的弱者の民権運動——『朝野新聞』にみる宮城県の多彩な結

社に注目して（新井勝紘）

第四章 〈反民権〉の思想史——福島・喜多方事件再考のために（松崎稔）

第五章 山県県内地域の自由民権運動——ワツパ事件と三島県政との関連を中心に（三原容子）

III 運動の背景とその後

第六章 明治初期のハリストス正教会と政治的活動——南部地域における動向を中心に（山下須美礼）

第七章 雲井龍雄と米沢の民権家たち——精神の継承をめぐる（友田昌宏）

第八章 自由民権運動から初期社会主義運動へ——単税論を軸として（後藤彰信）

東北自由民権運動関係文献目録（一九八六—二〇一五）（友田昌宏）
あとがき（友田昌宏）

共著の書籍に対する書評であれば、ここで各著者の担当にあわせて各章の要旨を順次述べるべきだが、残念ながら紙幅が限られていてその余裕がない。本書掲載の各論考については編者である友田氏による簡便な紹介がある（八—二四頁）ためそちらにゆずれ、以下本稿は、本書の全体を踏まえ論点をしばった書評となることを断っておきたい。

また、一般的な書評の様式にならえば、既述の要旨を踏まえてその長所を述べ、その書が研究史上にいかなる貢献をなすものであるのか説明した後で、疑問点や不足部分をあげるといふ手順を踏むべきである。だが、本稿はその基本に則らず、あえて本書の枠組みに対する疑問の提示から始めることを許していただきたいと思う。

「自由民権」と「東北」。本書は、タイトルにあるこの二つのキーワードに関連する現在の研究状況を踏まえた問題提起の書といえる。自由民権運動のみならず東北の近代史に関連する研究は、友田氏によれば「停滞」し、かつ「不振」である（五頁）。その状況を打ち破り、東北の近代史研究、特に東北の自由民権運動研究を「活性化」（二四頁）させる呼び水になりたい、というのである。

だが、本書を通読し終えた時点で評者の頭に真っ先に思い浮かんだのは、「自由民権」という枠組みが依然固持されていることに対する違和感だった。

研究史の整理が主題である第Ⅰ部の二つの章と、最終章の第Ⅲ部第八章を除き、本書の中核をなす、第Ⅱ部第三章から第Ⅲ部第七章までの五つの章は、明治ゼロ年代～一〇年代の各地域を調査考察の対象としている。たしかに、そこは自由民権運動の現場であっただろう。しかしながら、本書の所々でも示唆されているように、各地域には、明治一〇年代に至るまでの前史があり、その後の歴史の展開もあった。だとすれば、考えるべき方向性は自由民権運動という時代の流行への一般化ではなく、むしろその逆だったのではないだろうか。流行に乗って一時的に運動に参加することになったものの、それに挫折して転向を余儀なくされた人びとの思想と行動に対する理解の深化を目指す。あるいは、そうした一過的な流行と対決した側の心理と論理に寄り添って新たな評価を加える。そのような集約の仕方があったのではないだろうか。

評者がそう考えた理由の一例として、編者の友田氏自身が担当した第七章をとりあげたい。

米沢の雲井龍雄が具現していた「有司専制批判の精神」が宇加地新八、杉原謙、山下千代雄といった同郷の後輩たちに継承されていたというのが友田氏の主張である。自由民権運動が時代の主流だった明治ゼロ年代～一〇年代、在野の新聞などを舞台に華々しい政府批判を行った彼らに限ればそう評価できるかもしれない。だが、その後軍人となった宇加地、政府に出仕した杉原、政党政治家に転身していった山下という三人の後半生のことを踏まえたとき、気になるのは、彼らの生涯全体からみれば若かりし時代のごく短期間で完了した言論活動ではなく、そういう青年期を過ごしたにもかかわらず、やがては政府の一員となりおおせた彼らの壮年期以後の思想と行動の様式である。

政府の末端に連なった宇加地と杉原を転向者として蔑むというのではない。山下の政治活動の行き詰まりを見下すのでもない。青年期の熱中から覚め、当初思い描いた理想の世界の実現が不可能なことを悟ったとしても、それでもなお、彼らは生きてゆかねばならなかった。彼らの言行不一致や前後の矛盾を直視し、その上で、それに寄り添った人物理解を目指せば、あえて「自由民権」という枠組みに縛られる必然性はなくなる。むしろ、その縛りは彼らを理解する際の妨げとなるだろう。つまり、単に自由民権運動研究ではなく、その前後の展開までを視野に入れた思想史研究を深化させることによって、日本近代史を描き直すことができるようになるのではないだろうか。このことは、友田氏自身が単著『戊辰雪冤―米沢藩士・宮島誠一郎の「明治」』（講談社現代新書、二〇

○九年）で展開した議論―戊辰敗戦を経験した米沢藩出身の宮島誠一郎が、その後、中央政府の官僚としての後半生を生き抜いた姿を描き出した―とも密接につながるはずである。

さらにもう一つ疑問点をあげれば、タイトルである「東北」、及び「東北の自由民権」それ自体について、本書は何らかの結論なり新しい展望なりを示したわけではない、ということである。

本書所収の各論考が扱った地域を県単位で見ると、福島×二、宮城×三、山形×二、青森・岩手×一となるが、これを旧藩の区分（支藩は本藩を含む）で整理し直せば、会津、仙台、庄内、南部（八戸）、米沢という五つの地域のみに限られていることに気づく。現在の山形県や福島県に散在していた小藩、そして何より、大藩である津軽と秋田についての論及がみられない。

そのため、本書が射程におさめるのは「白河北（外ヶ浜以南）」総体としての「東北」ではなく、その「東北」の名のもとで要求された「自由民権」でもない。「東北コンプレックス」や「東北セクショナリズム」を問題とし、「本書所収の各論文は東北特有の地域性がにじみ出たものとなる」（八頁）という前置きがあったにもかかわらず、本書を読み終えた時に評者が感じたのは、他ならぬ「東北」の不在である。むしろ「東北」という枠組みによる縛りを解き放ち、まずは、各地の明治一〇年代が、その土地固有の歴史的経緯のため依然混沌とした状況にあったという事実認識を、より徹底させるべきではないかと思われた。

3

さて、「自由民権」や「東北」といった既成概念を脇に置き、あらためて読み直してみると、各章の論考によって明らかとなった事実関係は数多く、本書が日本近代史の豊かな鉱脈を掘り当てて貴重な成果をあげていることに気づかされる。そして、これぞ共著を読む際の醍醐味というべきだが、同じ研究対象が複数の研究者の眼で異なる角度から観察されることによって、新たな歴史展望が拓かれる瞬間に立ち会うことができる。

その一例として、本書の中心ともいえるべき第Ⅱ部の二つの論文に登場した三島通庸とその周辺に注目したい。

第四章松崎論文の主題は会津地域の自由民権運動と敵対した旧会津藩士たちである。三島県政とそれに弾圧された在野民権運動という明治一〇年代時点の二極的対抗関係を再検討するにあたって、いったん時間を巻き戻したときに浮かび上がったのは、幕藩時代における武士対豪農の身分差別、戊辰戦争における会津藩士対土佐藩士の激突、そして明治維新後における武士の没落と豪農の台頭である。つまり、維新後に辛酸をなめた旧会津藩士の立場で見れば、一貫して自分たちに対峙する相手だったのは豪農たちで、そこに土佐藩が加わったのである。

会津地方の自由民権運動とは、その豪農と旧土佐藩士（自由党）が結託し、さらに下層の人民を巻き込んで勢いを増したものに他ならない。その増長に憤った旧会津武士たちが、鹿兒島出身で第三者の立場にあつた三島の指揮する県政に協力し、自由党主導の政治運動と敵対してゆくのは成り行き上、当然となる。彼らの結集原理は怨恨だった。何らかの理念や主義への共鳴ではなかったため、怨みが晴らされるなど状況が変

われれば結合の必要性もなくなる。喜多方事件で民権運動の弾圧に一定の成果をあげた一派が、会津帝政党の組織化を不調のうちに終えることに對する説明としても、これはきわめて説得的である。

そうした状況の推移に對する透徹した洞察は第五章三原論文にも通底する。評者が興味深く読んだのは、「ワツパ事件」後に庄内地域の自由民権運動が盛りあがった理由について、指導者の森藤右衛門の理念や行動力のみならず、「反対せねばならない事態が生じて初めて政治意識が活性化する」(二〇三頁)という評価に結ばれるまでの議論の運びであった。したがってその「事態」がなくなれば、運動とその組織化の前提が失われてしまう。三島県令の転任と森の死後、やがて庄内地域に安定した支配体制が確立されるに及んで、当地で「ワツパ事件」や自由民権運動の記憶が急速に風化していった現実を理解する際にも、示唆に富む視角である。

三原氏は本論考を「中間報告」と位置づけており、今後、三島県政に協力した旧鶴岡藩上士層「御家祿派」に関する調査も進めるということである。それによって、自由民権運動という一過的な流行に對峙した側の心理と論理が剔出されれば、従来通説が塗り替えられる可能性は高いといふべきだろう。

4

以上、評者には最も重要と思われた論点的を絞った評となった。結局、本書ははからずも、研究の進展によって「自由民権」や「東北」と

いった既成の枠組みがすでに失効しつつある現状を明らかにしているのである。つまり評者は、本書が「東北の自由民権」という限られた分野にとどまるものではなく、より広い意味で日本近代史研究の深化に貢献しうる、といいたいのである。

限られた紙幅のため割愛せざるをえなかったが、第一章河西論文が論じたかつての福島大学経済学部に所属した教員たちによる自由民権運動研究の先駆性、第二章千葉論文と第三章新井論文で連続的に取り扱われた宮城県内における自由民権運動の裾野の広がり、第六章山下論文で問題とされた自由民権運動と宗教との関係性、第八章後藤論文のテーマであった自由民権運動から初期社会主義への継承など、本書に教えられることは他にも多々ある。各論考は一見独立しているようだが、それぞれの中に意外なつながりを発見できるところも、本書を読み進めてゆく際の楽しみの一つである。本書を手にした読者諸賢におかれては、そうした発見を基に新たな歴史展望を拓かれることを是非勧めたい。

(二〇一七年二月刊、A5判、三四五頁、定価五八〇〇円＋税、日本経済評論社)

(すずき・ひろたか 熊本大学大学院人文社会科学部 文学部歴史学科准教授)